これからの猪猟〈12回〉

田宮　治

極地の噛み止め芸とは!?

よく実戦記事の中で「今日の猪跡は大きいので、噛み、鳴き自在のマロ号、シロ号、ヨシ号を連れ出して……」と、ごく当たり前のように書いているが、猪猟で一番の猪止め芸は「鳴き止め芸」と「噛み止め芸」を犬自身の判断で自在に使いこなせる猪犬のことである。この二つの芸が猪猟の一流犬の証なのである。

超一流犬のマロ号、ヨシ号、武蔵号、ブイ号、カツ号のクラスになると、この「二つの芸の融合芸」、つまり鳴いては噛み、また噛んでは鳴くという「完全な融合芸」を連発して猪と対戦しているので、ケガもなく何時間でも大猪が止められるのである。だからこそ、七十七歳になる私でも一人で簡単に猪を撃ち獲れるのだ。

「噛み止め犬が良い」とか「鳴き止め犬が良い」と言っているうちはまだまだ先の見通しができていない証拠である。本物の猪止め犬が繰り出す超一流芸とは、私の一軍猪犬軍団が実戦の場でいつも見せる完成度の高い強烈な噛み止め芸である。その代表的なものが、見事な寄せ鳴きで寝屋でそのまま止め切って撃たせてくれる寝屋止め芸である。

さらに、その猪が寝屋から飛び出して逃げると、二、三頭の犬たちで猪に追いすがり、一気に噛み込み、見事な谷落としで山の中腹の窪地や谷底で噛み止めて撃ち獲らせてくれる。

また、猪の頭に思い切り噛み付き、猪に自身の体をぴったりくっ付けて放さないという犬を「噛み一番犬」と呼び大切にしている。そして、逃げる猪の足にギャッギャッと鳴きながら噛み付いて猪を止め切る芸は、千代号、さくら号、富士美号などの牝犬が得意とする芸であり、この芸がないと猪は止まらない。私はこれを「チョンガケ芸」と呼んでいる。

また「こら逃げると噛むぞ！」と、猪を射竦(いすく)めて長く止め置く芸を、私は「射竦め芸」と呼び、この系統の猪犬を大事にしている。これは猪猟で猪犬が繰り出す最高芸であり、ケガがない。

さらに、猪犬が超一流に完成した時に堂々と繰り出し、猪を中心に大きくラウンドして鳴き続けることで、猪を絶対に逃がさないラウンド芸もある。

マロ号がいつも繰り出す凄い究極芸は、ヨシ号やブイ号もやるが、猪が逃げると一回か二回は止めるが、マロ号のように猪を撃ち獲るまで何時間でも止めるということはない。

マロ号は猪がその場から逃げ出すと、鳴かずに追いかけ、そして、また止め切ると止め鳴きを連発して私を待ち続け、獲るまで鳴き通すのだ。今猟期のマロ号は猪を八回止め切った。赤坂氏が二回寄り付き、四発を撃つも取り逃がしたが、マロ号は猪を絶対に逃さない凄いラウンド芸をいつも見せる。

まだまだ数え上げれば切りがないが、これらの芸は「鳴き止め芸」と「噛み止め芸」が実戦で鍛えられ、見事に絡み合い、融合し合って出来上がった素晴らしい一流芸である。

ちなみに、鳴き止め芸をどんなに上手に使う猪犬でも、ただ鳴くだけでは猪は絶対に止まらない。その証拠に、例えばビーグルなど

が鳴きながら猪の寝屋に飛び込めば間違いなく猪は飛び出して逃げる。そして、鳴き止め犬は切られないと思っていても、それは猪猟人が思っているだけで、猪は仔犬（六、七カ月）であろうと、鳴き止め犬であっても、猪に近付き吠え込めば必ず猪は突いて来るものである。

このことではっきり言える真実は、ケガをするのはどんな犬でも全く同じで、猪が断然強くて犬たちが弱いからにほかならないのである。

中部林道から7時間以上も猪を追っかけ、こんな近くに甲府の街が見下ろせる所まで来てしまった

以上の検証でもうお分かりのように、猪猟の実践を鳴き止め犬でやろうと、噛み止め犬でやろうと、そんなことはどうでもよいことなのだ。本当に大事なことは、どんな特技を繰り出す猪犬を作り上げようと、いかに無傷で戦い通すかであり、必ず完勝しなければならないことなのである。

すべての点において、猪犬頼りの単独猪猟の中では、何があっても絶対に猪犬たちを守り抜き、どんな猪にでも万策を尽くして戦い続け、無傷で完勝しなければならない。まさに「これからの猪猟」となるのである。

だからこそ、私は人生を懸けて死にもの狂いで挑み続け、やっと完成した猪犬群を俺流猪猟の真ん中に据え置き、猪猟道の胸突き八丁を意地とプライドを懸けて登り続けて来たのである。

お陰で喜寿を迎えた今猟期も、一人で撃ち獲った猪は、二月十日現在で三十六頭に上った。それ以後は大雪のため出猟できない日が続いており、目標の五十頭は危ぶまれるが、まあまあの成果に満足している。

私はこの年になっても、元気で山中を駆け巡り、今までにない頂点に立っている自分と、今を盛りと咲き誇っている私の愛犬たちに心から感謝して、残り少なくなった山梨の猟場に思いをはせているところである。

まだまだ猪猟に懸ける思いは山ほどあるが、今でも、新しい猪犬芸をどんどん繰り出して私を喜ばせてくれて、驚くほどの進化と成長を遂げている。この猪犬群団を何とか全国に広め、そして守り抜いて次世代まで残し、私の名代として俺流猪猟を伝えてもらえないものか、そんな途方もないことを考えているところである。

玄関にいるマロ号は、そんなことを知ってか知らずか、「ジジ、山に行こうよ」と私をしきりに催促している。まだまだ大きな夢だけが果てしなく広がっている。

次回は「この犬芸がこんな猪猟をやる」という究極の一戦を発信したいと思う。

（つづく）